

A decorative border with a repeating floral and vine motif surrounds the text.

本古典集成

堤中納言物語

塚原鉄雄 校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第五六回）

つづみちやうなごんものがたり

堤中納言物語



定価一八〇〇円

昭和五十八年一月十五日 印刷
昭和五十八年一月二十日 発行

校注者 塚原鉄雄

発行者 佐藤亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 東京03(二六〇)五一一(業務)
東京03(二六〇)五四一一(編集)
振替 東京 四一八〇八

装画 佐多芳郎
組版 シーティエス大日本
製本 新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

凡例

.....

三

このついで

.....

九

花桜折る少将

.....

一九

よしなしごと

.....

三一

冬ごもる空のけしき

.....

四一

虫愛づる姫君

.....

四五

程ほどの懸想

.....

六五

はいずみ

.....

七五

はなだの女御	九五
かひあはせ	一二五
逢坂こえぬ権中納言	一三三
思はぬ方にとまりする少将	一四九
校訂覚書	一六九
解説	一七七

凡 例

一、現代の一般読者を対象として、『堤中納言物語』の本文を提供することを意図する。

一、作品の本文は、京都にある、賀茂別雷神社の三手文庫に收藏する、今井似閑自筆の写本を底本として校訂する。

一、本文の校訂には、表記と句読とを除外して、可能なかぎり、底本の本文を改変しないことを原則とする。底本の本文を改訂したものについては、別項の「校訂覚書」に列記し、その経緯を略述する。

一、本文校訂の基本方針として、一三項を指定する。

A 仮名遣いを、歴史的仮名遣いに統一する。

B 適宜、仮名表記を漢字表記とし、また、漢字表記を仮名表記とする。ただし、用語による表記の統一は、補助用言を仮名表記で統一するほか、形式的な統一を回避する。

C 語形は、底本表記の語形を踏襲する。例示すれば、「そつ（帥）」は、一般に、「そち」の形態で通行しているけれども、底本「そつ」の形態を保存する。

D 私解によって、本文に句読を加点し、会話表記には、鉤括弧「」で、その首尾を明示する。

E 心話表現のうち、二文以上の構成で、首尾の捕捉に便宜かと思量するものについては、鉤括弧

で表示することがある。

F 文脈の展開を把握する便宜を勘案し、段落を指定して、段落ごとに改行する。

G 一個または数個の段落が、一個または数個の段落と連合して、文章構成の単位段落を構成することがある。段落連合の境界を一行空白として顕示する。

H 挿入表現のうち、単独で段落を構成するものは、本文二字下げとして明示する。序文と跋文びやくぶんについて、同様の処理をする。単独で段落を構成しない挿入表現では、その首尾を、ダッシュ——で明示する。ただし、煩瑣はんさに配慮して、簡単な挿入表現には、読点だけを加点する。

I 注記は、頭注と傍注（色刷り）とに区分する。頭注には、本文の説明と和歌の解釈とを記載する。そして、傍注には、部分の訳文と省略の指摘とを記述する。

J 頭注の説明は、一般辞書との重複を抑制し、本文の理解と作品の鑑賞とに、直接に参考となることを意図する。

また、段落内容を要約して、段落冒頭的位置に、色刷りで冠冒する。ただし、この冠冒標示は、論理的な観点からの徹底を意図しない。修辭的な観点をも導入して、「物語」としての展開を、論理と感性との融和によって享受しうるように配慮するつもりである。論理的な基幹構成の認識と理解ということでは、「解説」の諸編に、その実例を提示する。

K 傍注の訳文は、作品本文の表現に即応することを原則とする。ただし、会話表現については、話者の気分をも反映しうる翻訳を志向し、地の表現については、表現の構成に即応しうる訳出に配慮する。

L 会話表現の話者および和歌表現の詠者を、本文の右傍に注記し、丸括弧（ ）で表示する。

M 随時、主格、目的格、所有格に相当する語句を傍注とし、亀甲括弧「」で表示する。これは、傍注の現代語訳とは別個の次元に成立する説明である。

一、頭注および傍注の作成には、諸家の研究に依拠するところが多分にある。列記すれば、「堤中納言物語研究文献目録」ならびに「古代国語研究文献目録」となるはずである。ここでは、その事実を銘記し、謝意を表白するにとどめる。

一、巻末の「解説」では、作品本文の理解に参考になるかと想定する事項の若干について記述する。

なお、「解説目次」と「解説凡例」とを、「解説」の巻頭に収載し、「解説」の意図するところをたのめ闡明する。

堤中納言物語

いのち

春雨の煙る、昼ごろの後宮である。天皇の渡御がない、女性ばかりの殿舎には、無聊と倦怠との空氣が漾曳している。年若い女御は、所在のない徒然に、鬱屈した心境で、漫然と降雨に見入っている。そうしたときに、宰相中将が参入する。女御の兄弟と想定される青年公子である。大臣の子弟で、十代の後半といったところか。家格と官位とから、年齢の概算が可能であった時代である。物語の中核となる人物が、美男であり美女である映像で規定される時代であった。将来の栄達が保証されたと看做される参議兼近衛中将の登場で、女房たちの活気づくのは、当然というより、自然であつたらう。

宰相中将の持参した薫物を契機として、女御の徒然を解消することにもと、「あはれ」と感銘した見聞を、順次に物語る、——そうした舞台設定で、三者三様の物語が展開する。

作品全体は、「あはれ」で統括されている。けれども、物語素材に、直接の相互連関はない。一種のオムニバス omnibus 形式を採用する構成といえよう。相互に分離して自立する素材を、一個の主題によって、一編の作品に統合する作品形象は、この作品の創始と看做してよからう。標題は、作品本文の、「この御火取のついで」と「あいなき事のついで」と、とくに、「この御火取のついで」に由来する。「この御火取」の「こ」は、近称の指示表現だが、掛詞による連想喚起の映像は、「籠」となる。すなわち、薫物の「火取」の縁語で、「此の御火取のついで」は、「籠の御火取のついで」でもある。『源氏物語』（梅が枝）で、「このついでに、御方がたの合はせたまふ」と、薫物合のことがある。「薫物—火取—籠—子」の連想で成立する第一話の恋愛を、第二話の厭世から第三話の出家へと、「このついで」の連鎖的展開が具現していく。

一「起きもせず寝もせず夜をあかしは春のものと
ながめ暮しつ」(『伊勢物語』二段)を典故とする。
典故の晩春を孟春とし、女と別れた後の男の感懷を、
男(天皇)を待つ女(女御)の心境に転換した技巧で
ある。「長雨」と「眺め」との掛詞。

二女御の動作。兄弟と推定される宰相中将との対応
で、入内して時日の浅い女御である。藤 春日の後宮
原定子と藤原伊周、明石姫君と夕霧(源 氏物語)など、女御で入内し、のちに中宮―権中納
言の対応関係が成立する。

三女御御殿の台盤所。台盤(食物を盛った器を載せ
る台)を置く部屋で、女房の詰所。

四宰相(参議。正四位下相当)で近衛中将(從四位
下相当)を兼任する男性。『枕草子』(二七〇段)に、
「上達部は」として「宰相の中將」とあり、後宮女性
には花形の、十代後半の青年で、女御は十代前半か。
五貴族は、男女ともに、その衣服に、独自の香料を
焚きしめる。したがって、嗅覚印象だけで何某と判別
する。「例の」で、宰相中将が、女御の女房たちに、
顔馴染みとなっていることがわかる。

六父君(女御の父親だから大臣)の邸宅の東の対屋。

七薫物は、湿度を保存し効果を發揮するために、地
中に埋める。期間や場所には、秘法があったらしい。

八女房の呼称。中納言(從三位相当)である人物が
縁者であることに由来する。

九女御の御帳台。貴人が座臥し、寢所とする。

「女御が」

「春雨を」ニ物思わしげに見やうていらつしやる

春のものとして、

ながめさせたまふ屋つかた、台盤所なる人び

と、「宰相中将こそ、参りたまふなれ。例の御にほひ、いと

はつきり

「宰相中将が」ひざまずきなさて

しるく」などいふほどに、ついおたまひて、

(宰相中将)よべ父君のお邸さぶら

「昨夜より殿に候ひしほどに、やがて、御使になむ。東の対

の紅梅のしたにうづませたまひし薫物、今日のつれづれに、

試みさせたまふとてなむ——」

とて、えならぬ枝に、白銀の壺、二つ付けたまへり。

中納言の君、御帳のうちに参らせたまひて、御火取あまたし

く用意し。若い女房達に、そのまま直ちに

て、若き人びと、やがて試みさせたまひて、すこしさしのぞか

せたまひて、御帳のそばの御座に、かたはら臥させたまへり。

横向きに

一 紅梅色の織物。縦糸を紫、横糸を紅で織った布地で、若い女性が、春に着用する。柱姿であろう。

二 毛髪は、女性美の第一要件。真黒で光沢があり、真直で、身長に對比される長い髪が、豊富にあるのを尊重した。

三 女房の呼称。参議である人物が縁者であることに由来するが、女房としての個人的地位には直接の関係がない。ただ、出身家柄の社会的地位を反映し、女房としての階層も察知される。公卿の官名を呼称とするのは、上層の女房である。

四 貴族とくに親王家、摂家（摂政・関白に昇りうる家柄）、清家（大臣・大将に昇りうる家柄）の子女。男女ともにいう。ここは、姫君。

五 挿入表現。この、宰相中将の会話形式による物語は、その全体が、物語られる人物の視点と物語る中将の視点とが交錯して展開する一文構成である。物語られる人物の視点の表現は、助動詞「き」の統括する世界として、文脈の基幹を形成する。物語る中将の視点の表現は、助動詞「き」の統括しない世界として文脈の途中に挿入される。複眼 薫物の慕情的表現効果を期待しうる構成技法といえようか。

六 挿入表現。正妻の嫉妬による圧力が烈しい事例に、頭中将（源氏物語）がある。正妻の圧力の焦点は女（夕顔）で、女は遁げ隠れるが、ここでは、男が圧力の対象となり、男が足を止められる。共有知識を前提とする彼此対照の転換による複合的構成である。

一 紅梅の織物の御衣に、（二 豊かに波うつ） たたなはりたる御髪（御帳の陰から）の裾ばかり見えたるに、これかれ、そこはかとなき物語、忍びやかにして、しばし候（さぶら）ひたまふ。

宰相中将 中将の君、「この御火取（おほひとり）のついでに、あはれと思ひて人の語りし

ことこそ、思（おも）ひ出（で）でられはべれ」と宣（のたま）へば、おとなだつ宰相（さいしやう）の君、

「なにごとにかはべらむ。つれづれに思（おも）しめされてはべるに、申さ

せたまへ」とそそのかせば、「さらば。継（つ）いたまはむとすや」とて、

「ある君達（きんたち）に——忍（しの）びて通（とお）ふ人やありけむ——、いとうつくしき

児（こ）さへ出で来にければ、あはれとは思（おも）ひきこえながら——き（き）びし

き片（かた）つかたやありけむ——絶（た）え間（ま）がちにてあるほどに、思（おも）ひも忘

れずいみじう慕（しな）ふがうつくしうて、時（とき）どきは、ある所（ところ）に渡しなど

七 客觀的事態の主觀的表現。「心ぐるしげ」は、姫君の様子だが、「心ぐるし」とは、姫君の様子から觸發される感情である。姫君も、「心ぐるし」と感じているのだらうが、それはともかく、男性が見て「心ぐるし」と感じる様子を、姫君がしているということになる。姫君の様子という客觀的事態を、男性の印象という主觀的心情で表現する方法である。形容詞シク活用の用法として、頻繁に指摘しうる。

へ子供だけが、このように、あの方について浮かれ出て行けば、薫物の火取りというその名のとおり、私は、「ひとり」つきりでここに残ったまま、恋い焦がれることだらう。——あの方を恋い焦がれる苦しみの仲間であつた子供までがいなくなってしまうのか。

「子」は、「子」と「籠（火取の籠）」との、「ひとり」は、「火取」と「一人」との掛詞。「思ひこがれ」の「ひ」は「火」との、「こがれ」は「焦がれ（焼けこげる）」との、それぞれ、掛詞となる。「火取」と「火」と「焦がれ」とは縁語である。一般の掛詞が、部分的な連想喚起にとどまるのに、この和歌は、掛詞の使用によつて、表現全体が、自立する二面世界を構成する。すなわち、「籠だにかく憧れ出でば薫物の火取やいとどおもひ焦がれむ」という擬人的な物の世界と、「子だにかく憧れ出でばたきもの一人やいとど思ひこがれむ」という心情的な人の世界とが、それぞれ完結した世界として表裏をなすところに、精緻な技巧が發現している。王朝和歌の到達した極地である。

このついで

のに対しても 早く戻して 〔姫君は〕言わないでいたがほどへ〔姫君の住居に〕
するをも、いまなども言はでありしを、程経てたち寄りたりしか

ば——いとさびしげにてめつらしうや思ひけむ——、かき撫でつ 〔子供を〕な
じつと見つめていたのだが 腰を落着けられない事情が 習慣になつ

つ見あたりしを、え立ちとまらぬことありて出づるを——ならひ 〔子供が〕
ていたので 〔子供が〕 しきりにいつて行きたがるのが おぼ

にければ、例のいたう慕ふがあはれに思して、しばし立ちとまり 〔子供を〕
て、『さらば、いざよ』とて、かき抱きて出でけるを——、いと 〔姫君は〕

心ぐるしげに見送りにて、前なる火取を手まさぐりにして、 〔子供を〕
せやるせない様子で 香好

子だにかくあくがれ出でばたきものの 〔姫君〕ハ

ひとりやいとど思ひこがれむ

と、忍びやかに言ふを、屏風のうしろにて聞きて——いみじうあ 〔男性は〕びやうぶ

はれにおぼえければ——、児もかへして、そのままになむ、ゐら 〔姫君の住居に〕
しきることになつた 泊つて

と、 身にしみてしみじ

（宰相中将） 〔その男性が〕

「いかばかりあはれと思ふらむと、『おぼろけならじ』と言ひし 普通の仲じやあるまい〔誘いをかけて〕

と、

一 音羽山清水寺。平安京の東部山地にある。本尊は十一面観音。延暦十七年（七九八）に、坂上田村麻呂が、延鎮を開山として建立した。観世音菩薩の靈場として尊信される。観音は、阿彌陀如来の脇侍だが、大慈大悲の菩薩として、とくに婦女子や庶民の信仰があつた。平安貴族とくに女性にとつて、清水参籠は、都市を離れて山野に小旅行するといった、地理的にも心理的にもまた様式的にも、日常性から隔離断絶の生活であつた。参籠は、日限を予定し、宿泊のために、局一問仕切りした部屋一を借用する。

二 衣服に焚きしめた香氣が、中納言の君の局にもただよつてくるのである。独自の薰物を使用するから、その香氣によつて、人物の個性、教養、趣味、家柄などまでが、おのずから判明する。したがつて、この女性性は、高貴の家柄で高尚な趣味のある、教養ある姫君と想像される。中納言の君は、無関心ではおられない。

三 同行の人物が少数なのは、この女性が、権力にも財力にも疎遠な境遇であることの示唆。すなわち、高貴の姫君が、沈淪不遇、孤影悄然といった映像。

四 中納言の君の関心は、嗅覚による興味の誘発から、閉繞する状況の感触、さらには、当人の举措の感得と、漸層的に昂揚する。

五 清水寺は、山中にある。「吹くからにあきの草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ」（古今集）五、文屋康秀を想起させる情景。

（その男性は姫君が）
かど、たれとも言はで、いみじく笑ひまぎらはしてこそ、止みにしか。

どなた 今度は 中納言の君の順番だよ
いづら、いまは。中納言の君」

（中納言の君）とんでもない香妒の連想
と宣へば、「あいなき事のついでをも、聞えさせてけるかな。あは
え、ごく最近のことをは お聞かせ申しましようよ
れ、ただいまのことは、聞えさせはべりなむかし」とて、

（中納言の君）
「こそこの秋ごろばかりに、清水に籠りてはべりしに、かたはらに、
ただ、屏風ばかりを、ものはかなげに立てたる局の、にほひいと
ても奥ゆかしく、三 同行の人物が数少ない感しで
をかしう、人ずくななるけはひして、をりをりうち泣くけはひな
どしつづ行なふを、たれならむと聞きはべりしに、明日出でなむ
どとの夕つ方、風いと荒らかに吹きて、木の葉、ほろほろと渾の
かたぎまにくづれ、色濃き紅葉など、局の前にはひまなく散り敷